TA との掛け合いで臨場感のあるリアルタイム型授業

科目名：細胞生物学･生物物理･基礎生命科学ほか

担当教員：石原健　教授（理学研究院）

形式：リアルタイム型

学年：基幹教育科目･理学部専攻科目

人数：90 人

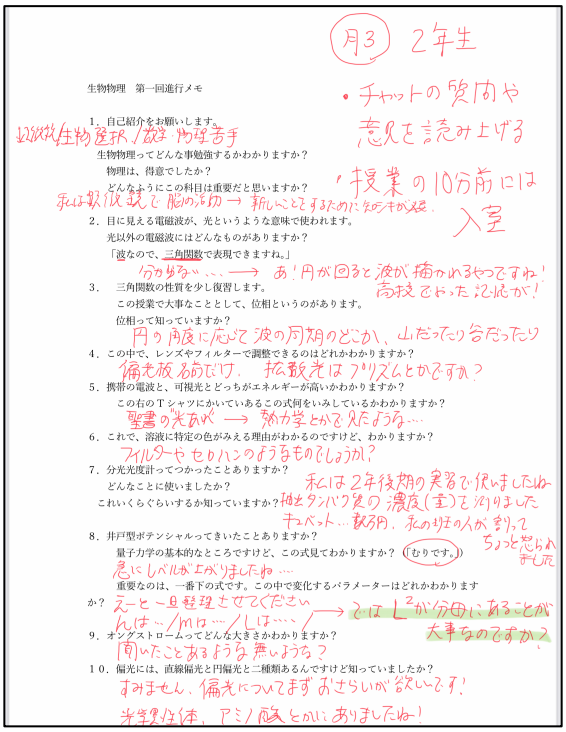
ツール：Teams

評価方法：レポート、出席

Q1. この授業で取り入れられた工夫について、改めて具体的に教えてください

この授業では、毎回 TA との「掛け合い」を取り入れました。私がかつて聴いていたラジオ番組を参考に考案したものです。毎回 30 枚程度のスライドを用いましたが、スライド 1 枚につき、最低一回、TA への問いかけ（少し考えると分かりそうなもの）、もしくは TA からの質問（学生からすると少しわかりにくそうなもの）を取り入れ、教員＋TA の 2 人で授業を進行しました。

TA には事前に進行メモ（右図）を渡しています。進行メモは、教員の目からして学生にとって理解が難しそうであるところを、TA に質問すること、TA から質問して欲しいことに分けて作成しました。また、この進行メモに書いていないことでも、TA には学生目線に立って、自由に質問・発言して良いことを伝えました。



教員から渡された進行メモに
TA が書いたメモ

Q2. 取り入れた結果、学生の反応はどうでしたか

学生からは、この授業法について、「理解が深まりやすかった」「臨場感がある」「アットホームであった」「対面でも取り入れて欲しい」などのポジティブな意見や TA に感謝する意見が多くあり、授業評価アンケートの結果を見ても、非常に高い評価でした。

Q3. 取り入れるために必要な準備

教員側は進行メモの作成（毎回約 1 時間）、TA 側は進行メモの確認と準備（毎回約 1-2 時間）が必要です。また、掛け合いで進めるため、教員と TA が気心知った仲であることが重要だと思います。

～インタビュアー雑感～

今回の工夫は、TA に学生の立場を「代弁」させることで、学生の目線を取り入れつつ、授業進行もスムーズに行うことを可能にしていました。この方法では進行メモの作成と TA 側の準備が必要になりますが、非常に応用可能性の高い授業方法ではないかと思います。インタビューには TA さんにも同席してもらいましたが、「自分にとっても勉強になった」という発言が非常に印象的でした。